

山頭火ふるさと館報

第4号
令和2年4月

山頭火没後八十年 くろりり往生を果たした山頭火く

館長 西田 稔

放浪の俳人と言われた種田山頭火は、晩年の十四年を一笠一鉢一杖の行乞と句作に過ごし、最後は松山市の一草庵で五八歳の生涯を閉じました。

山頭火が息を引き取ったのは、今からちょうど八十年前の昭和十五年（一九四〇年）十月十一日の未明のことでした。前日の十日の夜は、一草庵で俳友たちと定例の句会が催されています。この時山頭火は隣の部屋で横になって寝ており、俳友たちは寝ている山頭火をいつものことと思っておりました。句会も終わり、俳友は皆帰りますが、高橋一洵は山頭火が気になって午前二時頃庵を訪ねて声をかけます。しかし、山頭火はこのときすでに意識が朦朧としており、急いで医者と呼ぶもののそのまま帰らぬ人となりました。

▼一草庵（平成29年撮影）



死因は脳溢血による心臓麻痺といわれています。波乱に満ちた人生を送った山頭火の最後はあつけないもので、その亡くなり方は彼自身がずっと望んでいた「くろりり往生」であったといえるでしょう。

山頭火は亡くなる一年前頃から自分の寿命がそう長くないということを感じていたよううで、昭和十四年に湯田温泉の風来居を捨てて、佐野（現在の防府市佐野）に嫁いだ妹シズを訪ね、親しい友人たちにも別れを告げ四国巡礼の旅に出ています。この時に托鉢になくてはならなかった鉄鉢を親友の久保白船に形見のように与え、袈裟も捨てて四国遍路をしており、山頭火なりの覚悟があったとみて取れます。

最後の年となる昭和十五年の正月は結庵した松山で迎え、年頭に当たっての山頭火の念願は、「本当の自分の句を作り上げること」と「くろりり往生となること」の二つでした。山頭火はこの年の五月に彼の一代句集である「草木塔」を携えて広島、山口、九州をまわり、大切な友に最後の別れを告げ、句集を贈呈しています。

そして十月にはくろりり往生を果たし、山頭火は年頭に当たっての二つの願いを叶えたこととなります。

山頭火の代表的な句として有名な「もりもりもりもりあがる雲へあゆむ」は山頭火の辞世の句と言われていますが、この句は亡くなる一カ月前の九月の日記に載っており、山頭火の句を作ろうとする強い意欲があらわれています。

目次

館長挨拶	1
企画展「周防三羽鳥 くろりり山頭火と白船・碧松く」	2
企画展「山頭火の書」	2
令和元年度山頭火ふるさと館書道コンクール	2・3
第二回山頭火ふるさと館自由律俳句大会	3
愛情防府フリーマーケット	4
消しゴムはんこ作り	4
山頭火カルタで書き初め大会	4
今後の企画展情報	4
山頭火・自由律句講座	5
【寄稿】母の面影を追い続けた山頭火の生涯に寄せて	5
収蔵資料紹介	6・7
今月の一句アーカイブ	8

昭和、平成、そして令和と時は流れ、今年山頭火が亡くなって八十年になります。山頭火ふるさと館では、没後八十年に因んで今年の秋に「没後八十年記念企画展」を開催いたします。山頭火の旅にスポットを当てて、旅先から出した山頭火の直筆の便りを集めてご覧いただく予定です。

没後八十年にしてまた山頭火の魅力の新たな発見があれば嬉しく思います。たくさんの方のご来館をお待ちしています。



▶もりもりあがる雲へあゆむ

企画展
周防三羽鳥
 ～山頭火と白船・碧松～

会期：令和元年九月十三日(金)
 ～十二月八日(日)



明治四十四年に創刊された自由律俳句の雑誌『層雲』は、全国の俳人から多くの投稿を集めました。主催の萩原井泉水はその中でも、山口県から投稿する三人の俳人「周防三羽鳥」を高く評価しました。

今回の企画展では、「周防三羽鳥」と呼ばれた防府の種田山頭火、平生・佐合島の久保白船、田布施の江良碧松の三人を取り上げ、それぞれの生涯と作品を紹介。また、明治末から大正初期の三人の交流がうかがえる資料も展示しました。

展示作品：【色紙】種田山頭火「まつたく雲がない笠をぬぎ」、【短冊】種田山頭火「鉄鉢の中へも霞」、【織物】久保白船句入り「遠くのはなしこそ月夜のいねの葉」、【团扇】久保白船「石がぬれてゐれば寒のあをい空」(平

生町歴史民俗資料館蔵)、【短冊】久保白船「窓にいととんぼがきて髪ゆふてもどつてゐる」(平生町歴史民俗資料館蔵)、【短冊】久保白船「かがまればふきのとう」(平生町歴史民俗資料館蔵)、【掛軸】久保白船「燕魚とぶ姫島は晴れてゐる」(平生町歴史民俗資料館蔵)、【掛軸】久保白船「お月様なら青いいちぢくの十三七つ」(平生町歴史民俗資料館蔵)、【色紙】江良碧松「遠く群れ来て稲雀うち雀は庭にゐる」(田布施町郷土館蔵)、【短冊】江良碧松「竹林の静けさに入りきて鈍をとる」(田布施町郷土館蔵)、【掛軸】江良碧松「起きてうぐひす遠くても鳴く」(田布施町郷土館蔵)、【短冊】江良碧松「句碑も雨に山頭火よ久方ぶりな」(田布施町郷土館蔵)、【雑誌】椋鳥会『五句集 寒さ』(複製)、【句帖】一夜会「井師歓迎記念句帖」(田布施町郷土館蔵)、【掛軸】久保白船画・種田山頭火賛「読書浄土」

企画展
山頭火の書

会期：令和元年十二月十三日(金)
 ～令和二年二月二十七日(木)



種田山頭火は、自らの句を短冊や掛軸にしたためていました。お世話になったお礼や友人からの依頼で書かれたそれらは、様々な筆致でそれぞれに味わい深く、書作品としても魅力があります。

企画展では、山頭火の直筆の書を紹介し、短冊や掛軸、扇子などの残された書から、山頭火の書きぶりを鑑賞しながら句に込められた思いを読み解きました。

※新型コロナウイルス感染症拡大予防対策の一環で臨時休館となったため、二月二十七日で終了しました。

展示資料：【短冊】「まつたく雲がない笠をぬぎ」、【短冊】「鉄鉢の中へも霞」、【掛軸】「鉄鉢の中へも霞」、【短冊軸装】「遺骨を迎へて ぼろ／＼流るゝ汗が白い函に」、【短冊軸装】「山すそあたゝたかなこゝにうづめます 遺骨を迎へた人にかはりて」、【短冊】「竹の子みんな竹にして住んでゐる」、【短冊軸装】「うれいこともかなしいことも草しげる」、【扇子】「うれいこともかなしいことも草しげる」、【掛軸】「ぼろ／＼酔うて木の葉ふる」、【掛軸】「枝をさしのべて葉さくら」、【掛軸】「春風の鉢の子一つ」、【掛軸】「緑平居」(すべて種田山頭火直筆)

令和元年度山頭火ふるさと館
書道コンクール

募集期間：令和元年七月一日～九月九日

表彰式：令和元年十月六日(日)

審査員：小・中・高等学校国語教育研究部の

先生方四名

防府市内の小学生から高校生を対象に、山頭火にちなんだ言葉を課題として書道作品を募集しました。部門ごとに、小学校一・二年生の部「みず」、小学校三・四年生の部「青い山」、小学校五・六年生の部「時雨」、中学生の部「山頭火」、高校生の部「ふるさと」の水をのみ水を「あび」を課題としました。応募数一一二一点の中から、各部門最優秀賞一名、防府市長賞一名、防府市教育長賞一名、山頭火ふるさと館長賞一名、佳作二名の計二十五名が選ばれました。
受賞者は以下のとおりです。

【小学校一・二年生の部】

- 防府市長賞 鈴嶋小都・華浦小2年
- 防府市教育長賞 飯田琉聖・新田小2年
- 山頭火ふるさと館長賞 縄本敦子・華浦小2年
- 佳作 石田華夢・華城小1年
- 佳作 田中陽翔・小野小2年

【小学校三・四年生の部】

- 防府市長賞 渡邊陽依・佐波小4年
- 防府市教育長賞 山根唄華・華城小4年
- 山頭火ふるさと館長賞 大塚咲花・松崎小3年
- 佳作 甲斐彩夏・大道小4年
- 佳作 木嶋蓮・佐波小3年

【小学校五・六年生の部】

- 防府市長賞 松井乃愛・華城小6年
- 防府市教育長賞 丸林優衣・松崎小6年
- 山頭火ふるさと館長賞 伊藤遙・華城小6年
- 佳作 岡本優芽・佐波小6年
- 佳作 福田千英・華城小5年

【中学生の部】

- 防府市長賞 山下詩瑠葉・潟上中2年
- 防府市教育長賞 有松優・華陽中3年
- 山頭火ふるさと館長賞 河村泉希・佐波中2年
- 佳作 境菜々花・右田中1年
- 佳作 福田千紘
- 山口大学附属山口中2年

【高校生の部】

- 防府市長賞 岡村紗和
- 防府市教育長賞 防府商工高校2年
- 山頭火ふるさと館長賞 藤井沙紀
- 佳作 松田彩花・防府高校1年
- 佳作 田中亜実
- 防府総合支援学校高等部1年
- 佳作 宮村真帆
- 高川学園高校1年

第二回山頭火ふるさと館
自由律俳句大会

募集期間：令和元年五月一日～十一月三十日
表彰式：令和二年二月二十三日（日）
審査員：富永鳩山・久光良一・門田美和子・西田稔（敬省略）

昨年度に引き続き開催した自由律俳句大会では、六か月の応募期間で全国各地から計二二九六点（一般の部一五五〇点、子ども部八四六六点）の作品の応募があり、その中から十三名が受賞されました。
結果は次のとおりです。

【一般の部】

- 最優秀賞 託児所でひとりぼっちを抱きしめている
- 防府市長賞 東京都 樋口盛一
- 小さなかくしごと雨にうつむく朝顔
- 京都府 金澤ひろあき
- 優秀賞 いい一日だった夕陽たつぷりのカーテン
- 愛知県 飯島隆

佳作

- 手を差し出すと握りかえしてくる小さな手
- 沖縄県 幸地潤
- 将来をつめ込んだリュックで肩が重い
- 沖縄県 玉城歌麟
- 苦瓜の支柱を解くひと夏を解く
- 山口県 藤井千恵子
- うねった道でゆるされてゆく
- 東京都 柳なつき

【子どもの部】

- 最優秀賞 雲をけりとぼして晴れにした
- 防府市教育長賞 奈良県 西田翔汰
- 正月の空にこいこむぎの音は美しい
- 埼玉県 平野昊燿
- 優秀賞 二度と帰ってこない母あの味噌汁が飲みたい
- 愛知県 早川凜亮

佳作

- 空にうかぶ満月をひとりじめ
- 奈良県 乾琴葉
- まちがえてもずっとぼくがいる
- 山口県 清水想太
- オリオン座のため息は三角形
- 埼玉県 中山友里奈

愛情防府フリーマーケット

日時：令和元年十月十九日(土)

第二十七回防府愛情フリーマーケットが開催され、当館もスタンプリリーのチェックポイントとなりました。館内では、「山頭火バツジを作ろう」と題し、山頭火の絵柄の入ったバツジやストラップ、マグネットなどを作るイベントを開催しました。山頭火のスタンプを丸く切り取った布地に押し、クルミボタンキットを使って簡単に作れるため、小さなお子さんから年配の方まで幅広い年代の方々に楽しんでいただきました。

他にも宇部市出身のイラストレーター、岡本よしろうさんが描かれた山頭火の顔はめパネルやコリントゲームを設置し、お祭り気分を味わえる一日となりました。この日は予想を上回る盛況ぶりで七百人を超える来館者がありました。

消しゴムはんこ作り

開催日：令和元年十二月十五日(日)
講師：田中教也(敬称略)

館報第三号で寄稿いただいた田中教也さんを講師にお迎えし、山頭火のイラストや句を彫って消しゴムはんこを作りました。参加者は十四名。まずは練習も兼ねて山頭火や防府観光マスコットキャラクター「ぶっちー」等のイラストを彫り、次に山頭火の句とイラストを彫りました。イラストに比べて文字は細

かく難しい作業でしたが、参加者はそれぞれ集中して取り組み、一時は会場が静まり返るほどでした。最後には、句を彫ったはんこをカレンダーの印刷された葉書に押しつけて令和二年のオリジナルカレンダーをお持ち帰りいただき、達成感のあるイベントとなりました。

山頭火カルタで

書き初め大会

日時：令和二年一月五日(日)

防府市と山口市から小学生十名の参加者がありました。はじめに低学年と高学年に別れてグループを作り、山頭火句のカルタ取りをしました。どちらのグループからも元氣よく札を取る声が上がりました。たいへん盛り上がりました。その後、取り札から好きな句を選んで短冊に書き初めをしました。カルタのときは打って変わり真剣な表情で書いていました。最後に句を選んだ理由も発表していただきましたが、それぞれに好きな理由をしっかりと話され、個性豊かな感想を聞くことができました。

出来上がった書き初めは市民ギャラリーに二月九日まで展示し、来館者にご覧いただきました。皆さん書き初めや選んだ理由などに感心して見入っておられました。



今後の企画展情報

響き合うことば

山頭火句の広がり

三月二十七日(金)～五月三十一日(日)

この企画展では、ひとつの言葉で多様なイメージを喚起するような手法が使われた山頭火句を紹介いたします。同時に、見る方向を変えることよってある文字が別の文字にも見えるアート「アンビグラム」を展示します。短い中にも広がりのある山頭火句の新たな魅力を、アンビグラムとともに楽しみください。

山頭火に出会った人々

六月五日(金)～九月十三日(日)

自由律俳人種田山頭火は、俳句雑誌『層雲』をとおして多くの友人がいました。その中でも、近木圭之介や大山澄太など比較的晩年の山頭火と交流のあった人々の作品や資料をご紹介します。

晩年の山頭火と出会ったことで、また山頭火にとっては若い世代との交流をとおして、お互いのその後はどう影響し合ったのかを考察していきます。ぜひご覧ください。

山頭火没後八十年記念企画展

山頭火からの便り 旅を記す

九月十八日(金)

令和三年一月十一日(月・祝)

自由律俳人種田山頭火は、全国各地を放浪しながら句を残しました。没後八十年を迎えるにあたり、主に旅先で記した葉書をご紹介します。旅中の思いや旅先での交友関係などを紹介しながら山頭火の旅を紐解きます。葉書を通して現れる新たな山頭火像をご覧ください。

山頭火・自由律句講座

山頭火を学ぶ会

令和元年六月より毎月一回開催

初回到西田稔館長による講話「山頭火の光と影」を開催し、その後種田山頭火顕彰会代表の窪田耕二氏、護国寺の橋本隆道住職、当館学芸員が、山頭火の俳句や日記についての講座を行いました。

自由律句を学ぶ会

令和元年十一月十三日より毎月一回開催

十一月から後期を開始し、前期同様富永嶋山先生を講師に、山頭火句や自由律句の解説とともに、実際に自由律句を作って講評し合いました。新たな参加者もあり、交流の輪が広がっています。

自由律句で遊ぼう

令和元年六月二十二日より第四土曜日開催

(全八回、八月と十一月はお休み)

小中学生を対象として、令和元年度は全八回開催しました。自由律句を作るほか、山頭火の生涯を紙芝居にした「種田山頭火のものがたり」を作りしました。

▼自由律句で遊ぼう
子どもたちの描いた紙芝居



▼山頭火を学ぶ会



母の面影を追い続けた 山頭火の生涯に寄せて

自由律俳句講師 門田美和子

「雨ふるふるさとははだしであるく」
中学生になって親しくなった友人宅の近くの杜にこの句碑はあった。この句が防府市が生んだ自由律俳人種田山頭火の句だと知った青年時代には、その姿が、そのころの父の姿に似ていて嫌いだった。

家族を持ち、第一子が生まれた頃、それまで浴びるように飲み、飲めば狂っていた父が、ピタリと飲まなくなつた。そして「死ぬ前ぐらひは畳の上で生活したい。」というので、夫の許しを得て、我が家で三人の子ども達（父にとつては孫になる）と暮らすことになつた。

その頃の父の言葉を二つ。
「親の死に目に会えなくても、他人様との約束は守りなさい。」
「どこの国の子どもも、こちらが誠意を尽くして付き合つたら、気持ちちは通じるよ。」

そして、吉佐教育事務所です仕事をさせていただいていた頃、山頭火に出会つたという方から次のような話を聞いた。

夏の暑い日、奉公していた店のお使いに行つた帰り、休んでいた公園で山頭火に逢つた。家が貧しくて上の学校へ行けなかつたと話したら、「学校へ行かなくても勉強はできるよ。この町にはたくさんのお店がある。その店名が漢字で書いてある。その漢字を覚えてほしい。少しお金がたまつたら辞書を買つて一頁づつ覚えてほしいよ。」と言われた。

そのお陰で、青年時代から働きながら文芸に親しむことができ、この年になつても地域の仲間と文芸に親しんでいる、と。

もう一人、「田中むつこさん」との出会いがなかったら、今の私はなかつただろう。防府の人に山頭火の句、自由律俳句をもつ

ともつと知つてほしい、親しんでほしい、との思いはおくびにも出さず、「ちよつと作つてみない?」「手伝つてくれない?」と声をかけて下さつた。なんの趣味もなく、五十代を迎えようとしていた頃だった。

「遠い耳へハガキの出版」(むつこ)：一人暮らしをしておられた自由律俳句のご先輩に、毎日電話をされていたむつこさん。そのご先輩が聞こえにくくなり、電話での会話がスムーズにできなくなつたので電話に替えて、はがきで毎日のご機嫌伺をされていたのだ。

「一緒に、自由律俳句を作らない?」とのお誘いで今の私がある。防府の子どもたちに親しんでほしい、と活動していたむつこさんの思いを継いで、私も子どもたちと一緒に、楽しく、また厳しく自由律俳句を学び続けたい。

戦争体験があつたにちがいないのに一言も話さないまま亡くなつた父に、十一歳で母の死を最初に見つけ、以後、母の面影を追い続けたのであろう山頭火の旅を重ねながら、戦後とともに生きてきた私にできることをさせていだだこう、と思つている。現在のわたくしです。

▼戎が森公園内の句碑
「雨ふる故里ははだしであるく」



収蔵資料紹介

①昭和十一年三月六日付
消印…三宮(三月七日)

表
愛知県津島町池ノ堂
池原魚眠様

裏
詩外楼居にて
種田生
三月六日夜

いよゝ東上すべく、今朝ばいかる丸でこゝまでやつて来ました、また御厄介になることでせう、大山君から第四句集が届きましたならばよろしきやうに、皆様へよろしく

②昭和十一年三月三十日付
消印…名古屋赤塚(三月三十一日)

表
県内津島池ノ堂
池原魚眠洞様
林五居にて
種田生
三月三十日

裏
たいへんお世話になりました、どうぞ御母堂御令室によろしく、お嬢さん坊ちやんにもよろしく、明日浜松へ出立いたします、津島での句はなかゝまともりません、そのうちまた

③昭和十一年四月二十一日付
消印…静岡川津浜(四月二十二日)

表
愛知県海部郡津島町池ノ堂
池原魚眠洞様
伊豆谷津にて
四月廿一日

裏
山翁に御目にかゝつて御尊など承りました、私も廿六日には参会したいと思つてゐます
す 一郎

廿六日にはお目にかゝれませうか、芽ぶいてたちまち
若葉する
水の
噴いてゐる 山

④昭和十一年五月二十日付
消印…長野岩村田(五月二十日)

表
愛知県
津島町池ノ堂
池原魚眠洞様
信州にて
種田生
五月廿日

御無沙汰がちですみません、こちらは梅桜桃李一時開といったやうな風景で、郭公がしきりに啼きます、これから草津へまはつて長野へ出ます、おたよりを下さいますならば長野局留置で願います、皆様によろしく

⑤昭和十四年十月二十三日付
消印…香川土庄(十月二十四日)

表
愛知県
刈谷町
(中学校長)
池原魚眠洞様
小豆島にて
種田山頭火
十月廿三日

□□はたいへんお世話になりました、あの時のこと忘れてはるませんけれど、何分にも思ふにまかせず、またさらにすまない思ひをしてをります、どうぞ十二月までお見のがし下さい、十二月になると、私にも多少の余裕が出来ます、あしからずお□□し下さいますやうに、私は今四国を巡拝してをります、皆様によろしく、そのうちまた、お大切に

裏
南郷庵 その松の木
ゆふ風ふきだした 山頭火

- 凡例
一、旧字体は新字体に改めた。
二、改行は原文どおりとした。
三、適宜、濁点及び句読点を補った。

【解説】

山頭火は俳友たちに頻繁に葉書を出している。それらは、日記には細かく書かれぬ『層雲』同人たちの交流の様子や山頭火の動向をうかがい知ることのできる、貴重な資料である。

このたび翻刻・紹介する収蔵資料は、愛知県『層雲』同人の池原漁眠洞に宛てた書簡五通である。当館所蔵の漁眠洞宛て書簡は『山頭火全集 第十一巻 書簡集』(1)『山頭火の手紙』(2)のいずれにも収録されていない。

昭和十年末、山頭火は当時住んでいた小郡の其中庵から約七か月に及ぶ旅に出立した。まず奈良まで行き、そこから福岡へ逆行し、昭和十一年の三月にばいかる丸で門司から神戸へ移動した。そこからまずは東京を目指し、その後は日本海沿いを経て平泉まで訪れている。

①は、ばいかる丸で神戸へやってきた際に出した葉書である。「また御厄介になることでせう」と、漁眠洞宅へお邪魔する予定であると伝えている。「大山君」とは、第四句集『雑草風景』の編集をした大山澄太のことを指す。

②は、三月二十七日に漁眠洞宅を訪問してお世話になったことに対するお礼の葉書である。

③は、数日を伊豆半島で過ごし、谷津(現・静岡県賀茂郡河津町)の松木一郎という『層雲』同人を訪ねた際に一郎と連名で出した葉書であり、同人たちの交流の一端が伺える。「廿六日」というのは、東京で層雲創刊二十五周年記念の大会が開催される日で、昭和十一年六月号の『層雲』に掲載されている大会当日の記録によると、全国から六十名あまりの自由律俳人が出席したが、漁眠洞は欠席し祝電と句を送ったようである。

なお、この葉書に記されている句「芽ぶいてたちまち若葉する水の噴いてある」は、『山頭火全句集』(3)にも収録されていない、山頭火の新出句である。

④は、旅先である長野の様子と、今後の旅程を記している。旅の最中、山頭火は局留めで葉書を受け取っていたので、この葉書に対する返事の宛先も知らせている。

また、この葉書の裏面は、「藤村詩碑畔より千曲川の展望」の写真である。「藤村詩碑」はおそらく小諸の懐古園内にある島崎藤村の詩碑であろう。五月十八日の日記に、懐古園を訪れたことが記されており、「藤村詩碑は立派なものである、藤村自身書いた千曲川旅情の歌が金属板にしてある、」と記している。

昭和十一年の旅から漁眠洞に宛てた葉書はほかにもあるが、今回はこの四通に留め、最後に昭和十四年の葉書を一通(5)紹介する。昭和十四年十月、山頭火は昭和七年から落ち着いて住んでいた山口を再び出て四国へ向かう。その旅の最中の日記は残っていないが、当該葉書含め各地の俳友たちに出した葉書を読むことによって、その間の山頭火の様子が見えてくる。

今回紹介するのは、昭和十四年十月二十三日付のもので、消印は「香川土庄」である。差出人として、「小豆島にて 種田山頭火」とある。さらにこの葉書は、裏面に小豆島の国指定名勝である溪谷「寒霞溪」の写真が印刷されているものであるが、その写真上には、登山記念スタンプが押されている。そして、「南郷庵 その松の木ゆふ風ふきだした」と山頭火が句を添えている。

この葉書から、山頭火がこの頃、小豆島を訪れていたことが分かる。さらに、大正時代に活躍した同門の自由律俳人尾崎放哉が晩年を過ごした南郷庵をも訪れ、そこで句を詠んでいるということも分かる。

旅先から漁眠洞に宛てた葉書は、その旅の行程を記し、いつ訪問するのか、返事の宛先はどこか等を知らせる事務的な内容も多い。しかし同時に、訪れた土地の風光明媚な様子を記したり現地で購入した絵葉書を使用した

りしているところから、山頭火が旅を楽しんでおり、その楽しさを伝えていっていると推測することができる。(山頭火ふるさと館学芸員・高張優子)

- (1) 『山頭火全集 第十一巻』春陽堂書店、1988
- (2) 村上護著『山頭火の手紙』大修館書店、1997
- (3) 村上護編『山頭火全句集』春陽堂書店、2002

④の裏
右上に「藤村詩碑畔より千曲川の展望(其二)」



⑤の裏
右上には写真の説明がある。
小豆島寒霞溪浦八景 其一
鹿岩

裏山または東の谷とも呼ばれる裏の谷の上方に碧空を突いて立つのがこの鹿岩で、秋の紅葉燃ゆる頃最も優れた景観をあらはす。(瀬戸内海国立公園)



今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和元年

九月 波の音をたえずして故郷遠し

昭和五年九月三十日

鹿児島・宮崎方面を歩いていた頃の句です。耳にする言葉は聞きなれないアクセントのため分からぬことも多く、寂しさややるせなさを感ずる余計に郷愁にかられたのでしよう。旅の途中で波の音をきつかけにして、ふるさとを思い出すこともあったのです。

十月 あてもなくあるけば月がついてくる

昭和七年十月十七日

眠れない夜や訪ねて来る人がなくて寂しいときなど、山頭火はよく散歩に出かけています。あてもなく歩きながら見上げた空には月が浮かび、周囲に人の気配もない場所では、自分と月だけがいるように思えたのでしようか。月を擬人化し、月と一緒に散歩をして寂しさを分け合っているような句です。

十一月 女学校運動会

ひかりは空から少女(オトメ)らはおどる

昭和九年十一月十二日

学校近くを散歩している途中に運動会を見かけたときの句です。晴れわたる空の下、秋の日差しが降りそそぐ様子を少女らにスポットライトが当たっているように表現しています。当時、気持ちがあふさがちだった山頭火の目には、明るい太陽の下で踊る少女らはまぶしく映ったことでしょう。

十二月 皇太子御誕生

およろこびの旗を立てみぞれするさへ

昭和八年十二月

前書きから、昨年四月に退位した現在の皇が、皇太子として生まれた際に詠まれたものということがわかります。当時、皇太子の誕生は日本全国に知らされ、国民全体がお祝いムードであったようです。山頭火は小郡の其中庵におり、東京の賑わいの中にいたわけではありませんが、皇太子の誕生という喜ばしい出来事にもそれぞれが降っていることすらもおめでたく感じられると言い、皇太子誕生を祝福しています。

令和二年

一月 お正月の誰もこない小鳥の合唱

昭和九年一月

誰の訪れもなく静かに其中庵で正月を過ごす山頭火自身と、小鳥がにぎやかに鳴いている様子が詠まれています。小鳥の句には其中庵時代の穏やかな山頭火の様子が詠まれています。誰も訪れないお正月を寂しいと表現せず、静かだからこそよく響いてくる小鳥の合唱に耳を傾ける様子が表現された、穏やかな句です。

二月

ならんであるく石だ、みしめるほどの雨

昭和七年二月

山頭火が旅の途中に長崎の『層雲』同人・松本十返花を訪ねると、数日にわたって歓待を受け、数人の仲間とともに様々な名所を巡りました。普段は一人で歩く山頭火にとって同じ目的の同行者はほとんどなかったことでしょう。直前には一人の道中で仕方がないほどの寂しさを感じていたため、友人たちと同行できる喜びが込められています。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時から午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日、十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅で「じんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第4号

令和2年4月1日発行

編集・発行

(公財)防府市文化振興財団

山頭火ふるさと館

〒747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

印刷

大村印刷株式会社

山口県防府市西仁令一丁目21番55号